



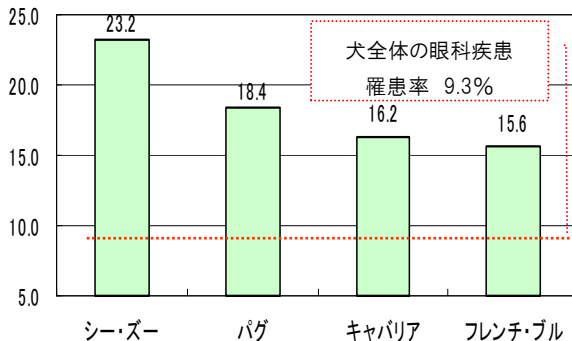
眼科疾患の発症率の年齢推移は？

■眼科疾患の発症率の年齢推移（犬）

【図1】眼科疾患 品種別発症率

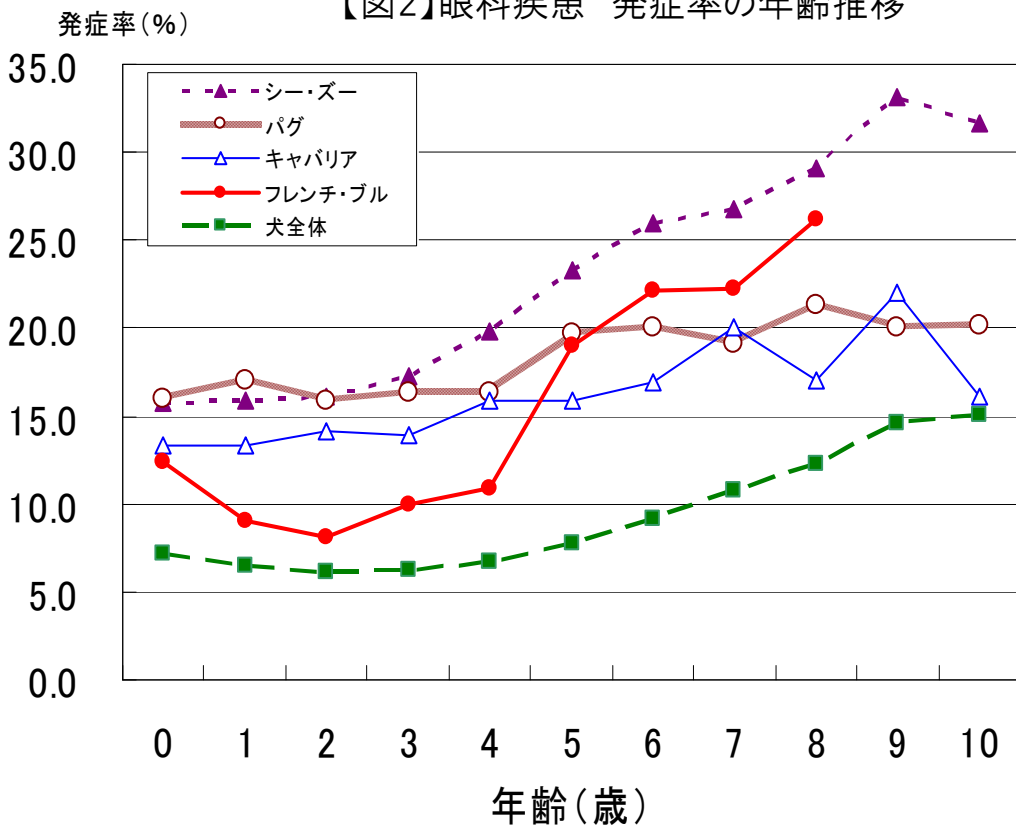
0～10歳の犬の給付金請求データをもとに、犬全体の眼科疾患の発症率(%)

発症率を調べたところ9.3%で、品種別ではシー・ズー、パグ、キャバリア、フレンチ・ブルドッグの順で発症率が高かった(アニコム家庭どうぶつコラムVol.015、図1)。そこで、当該4品種について、眼科疾患の発症率の年齢推移を調べたところ(図2)、パグとキャバリアは、加齢による増加率※がそれぞれ1.3、1.2と小さかったのに対し、シー・ズーとフレンチ・ブルドッグは、2.0、2.1と顕著にみられた。とりわけ、**フレンチ・ブルドッグについては、5歳以降急激に発症率が上昇していた。**



※各犬種における0歳と10歳を比較した場合の増加率

【図2】眼科疾患 発症率の年齢推移



※契約満了または死亡解約となった各個体の1年毎の契約について、その契約が開始した年齢毎に1契約=1頭とみなし、当該疾病について1回以上の請求があった犬の割合を発症率とした。

※2004年4月1日から2008年3月31日までにアニコムクラブの共済契約に加入した犬681,039頭を対象に、犬全体の眼科疾患発症率を算出した。

※各品種の発症率は、0～10歳のそれぞれの母集団が1,000頭となるように補正した後に、全体平均を算出している。例外として、フレンチ・ブルドッグは9～10歳の対象件数が10件に満たなかった為、0～8歳を対象とした。

**シー・ズー、
フレンチ・ブルドッグは、
加齢に伴い、顕著に眼科疾患の発症率が増加！**

